第24回
経営者のためのお中元のマナー

Profile プロフィール
現代礼法研究所 代表 マナーデザイナー
岩下 宣子
全日本作法会の内田宗輝氏、小笠原流小笠原清信氏のもとでマナーを学び、1985年、現代礼法研究所を設立。マナーデザイナーとして、企業、学校、商工会議所、公共団体などでマナーの指導、研修、講演と執筆活動を行う。

お中元は「季節の挨拶」ではなく「感謝の気持ち」

日本では古くから、お正月やお盆にご先祖様に感謝してお供えをする習慣があります。お中元は、お盆のお供えが、お世話になった身近な方へのお礼に転じたものです。よってお中元を贈る際に大事なのは、感謝の気持ちとそれを表す言葉。言葉で伝えきれない気持ちとして品物を添えるのが本来なのですが、ついつい「何を贈るか」にばかり意識がいきがちですよね。
贈る品に悩んだら、お中元の意味である“感謝の気持ち”を思い出し、相手の立場に立って考えてみてください。ちょっとした気遣いや先方に喜んでいただきたい思いがあれば、贈る側の気持ちが伝わる品選びができるはずです。

お中元の正しいマナーとは？

お中元は直接持参するのが本来のマナーです。事情が許すなら、ぜひお届けして口頭で感謝の気持ちをお伝えしましょう。配送でお届けする場合は、日ごろのお礼を伝える添え状が必要です。モノだけ贈るのでは、大事な"気持ち"が伝わりません。ネット通販などで添え状をつけるのが難しい場合は、事前に感謝の言葉と品物が届く時期を知らせる手紙を出しましょう。のし書きを「お中元」とする代わりに「感謝を込めて」というメッセージに変更するのもおすすめです。

お中元をいただいた時のマナー

会社宛にお中元をいただいた際は、3日以内にお礼を伝えるのがマナーです。電話だと業務の邪魔になることもあるので、手紙かメールでお礼状を差し上げましょう。メールでのお礼をためらう方もいますが、「メールで失礼します」と書き添えれば問題ありません。また、お中元のお返しは、しないのが基本です。もし自分よりも立場が上の方からお中元をいただいた場合は、時期を外して「暑中御伺」「残暑御伺」としましょう。
マナーは体裁ではなく“思いやりの表現”です。形式にこだわるより、相手の方が心地よく感じられることが大事だと思います。相手の方が喜んでくだされば、贈る側も嬉しくなるものです。マナーにとらわれすぎず、お取引先の笑顔を思い浮かべながら、お中元の風習を楽しみたいですね。

掲載：2016年6月